大西猪之介教授略伝

故教授大西猪之介は明治二十一年十二月二十八日京都の一商家に生まる。父岩次郎、母友、その四男三女のうち、教授は次男である。長兄夭折の為め父の意は専ら教授をして其の家業を継がしむるにあったが、母は其の才気の敏なるを愛でて常に薫育を怠らず、幼少より漢学の師に就かしめ、且つ夫に勧めて教授の切なる志を遂げしむるに至った。

明治三十一年三月京都滋野尋常小学校尋常科の課程を卒え、京都市立簡易商業学校を経て三十八年三月京都市立商業学校本科を卒業。同年四月神戸高等商業学校に入学して四十二年三月卒業。経済学に対する教授の深き趣味は、此の間列したる津村秀松博士の国民経済学講筵に於て培われ、心窃かに其の研究に一生を捧げんことを希うに至った。乃わち四十二年九月更に笈を負うて東上し東京高等商業学校専攻部に入って経済学を専攻す。

教授その学窓に在るや、俊敏なる生得の頭脳に加うるに異常の克己力行をもってす。雄勁の文章、流麗の辯舌夙くに聞こえ学力また常に儕輩を抜く、師の嘱望と友の畏敬とを一身に聚め得たるは固より、其の所である。

明治四十三年九月専攻部在学中、津村博士編纂国民経済叢書第一冊として処女作『帝国主義論』を発表す。時に年齢僅かに二十三、而かも其の稿案は既に神戸高商卒業前後に成りいたるに拘らず、論構の雄大にして引証の広濶精到なる、当年、識者の認むる所となった。これに踵いで姉妹篇『社会主義論』を起稿す。世未だ熟せずとして指導教授関一博士の、後転じて福田徳三博士の筐底に蔵めらる。

明治四十四年七月その専攻部を卒うるや、聘せられて小樽高等商業学校講師となり、大正二年一月教授に任命せらる。此の間、経済原論、経済史、経済政策を講述する傍ら、国民経済雑誌を繙りて絶えず研究を問い、また『経済大辞書』に二十数項に亘たる学説及び伝記を執筆す。因みにその前後、諸評論雑誌に散見せらるる「小西虎雄」とは教授の仮名であったのである。

大正二年一月海外留学の官命に接し、国民経済雑誌に『囚はれたる経済学』の雄篇を残して故国を去る。初め独逸ボン大学にてディーツェル教授に理論経済学を学び、後ストラスブルグ大学に転じてジムメル教授に私淑し、深く其の哲学思想より影響を受く。然るに欧洲戦乱の勃発は教授をして永く其の地に留まるを許さず、急遽旅装を整え、和蘭を経て英吉利に逃がる。『欧洲戦時の経済』その他の論策は此の地にて成れるものである。通じて四年半の歳月、具さに研鑽を積みたる教授は、仏蘭西、瑞西、更らには「燃ゆるが如き憧憬」の伊太利を訪ずれ、クローチエ、パンタレオニ等の門を叩く傍ら心ゆくまで西欧文化の精髄を味わい、亜米利加を経て帰朝す。時に大正六年八月であった。

帰朝後、教授の主力は専ら講学に注がれて居たが、其の傍ら『囚はれたる経済学』の続篇――『生と学との距離』――を起稿し、小樽高商経済学教授就職講演の一節と副題して大正七年三月以降の国民経済雑誌に発表してより各種の評論雑誌に筆を断たず。教授の思想漸く円熟の域に達す。八年十月『伊太利亜の旅』を著わし、九年一月『囚はれたる経済学』を上梓す。其の警抜なる着想、峻厳なる論理、偉大なる批判的綜合力は、絢爛の筆致、大胆にして端的なる自己表現と相俟って今猶お読書子を魅了せずしては已まぬ。尚お、教授は留学前より社会政策学会の幹事たり、而して国民経済雑誌に於ける其の大会記事は主として教授の筆に成れるものである。

講学及び著述以外に於ける教授の社会的活動は、相継ぐ各地にての講演、及び思想的団体別けても小樽啓明会の指導であった。これに依って地方文化の開発振興に貢献するところ尠からず、「大西」の名は北門の人々に親しめるものの一つとなった。

大正八年十一月、水梨岩太郎長女美穂子を容れて夫人とし、九年十二月一女を挙ぐ。貞子と名づく。

大正十年十二月、社会政策学会大会出席の機会をもって湘南地方に高臥し、不慮、腸チブスを得て帰樽。爾来気分勝れざりしも自から其の悪疾を悟らず医師また之を知らず、単に感冒の手当を為すに止まり、力めて食い、且つ病を押して登校、平生に異なるところ無し。而かも一月下旬病兆漸く歴然、遂に小樽伝染病院に移る。二月八日、病遽かに革まり午後十時三十分永眠す。訃報一度び到るや全校愕然として色を失い、学界また深く其の訃を悼む。二月九日茶毘に附し、東京青山墓地に葬むる。

享年三十五歳。法号を大智院教誉西順善道居士という。

教授は一面何人をも恐れざる強き闘争的個性の所有者であり、秋霜烈日寸毫も仮借せざる科学的真理の追求者であったが、他面濃やかなる情操、豊かなる芸術的天分の保持者でもあった。科学者的冷静と芸術家的熱情の融合渾一、其れが教授の真面目であった。その語学上に於ける造詣は深くして英、独、仏、伊の諸欧語に通じ、その学は博くして啻に自家専門の経済学に止まらず、哲学、社会学、文学に渉り、その鑑賞は美術、音楽、演劇にまで及んだ。もって、教授の調和的にして多方面なる趣味性格の一面を描き得よう。

教授の講筵に列なるものは、その該博の智識、透徹の論理に皆斉しく襟を正し、時には持てる筆忘れて、進り出ずる教授の灼熱したる人生観的断想に陶酔するのであった。当年小樽高商学生間に行われたる談論の中心は多く教授に依って与えられた学問的論題にかかり、その特色ある音声と抑揚すら何時しか一部学生の做うところとなった。

教授の学問は同時に教授自身の生活であった。経済原論に、経済政策に、教授の常に発足し又到達せる論点は、学理と政策との区別――「生と学との距離」であったが、此の難問に答うるに、教授は強く歩み来たれる己れ自身の生活をもってした。而して教授が自己の生活信条としてその門弟に遺した最期の言葉は、「日々生きる瞬間を最もよく生きよ。」と云うことであった。

晩年に於ける教授の主たる関心事は『経済原論』『経済史』及び『経済政策』の大成に在り、只管に彫刻を打ち加えつつあった。『経済史』は略ぼ意に満ちたるものの如くであったが、遂に業半ばにしてまた立つ能わざるに至ったのである。わが経済学界の先達、すでに教授に許すに斯界の鬼才をもってせらる。天稟すに齢をもってせるならんには、やがては赫奕たる一里塚を、斯学発達の道程に建立する天才たり得た事であらう。

（附記）本略伝は、評論集『人口と国力』附録小伝、その他の資料に基づいて編纂者の新たに草し、夫人及び令妹の校合を経たものである。

大西猪之介教授特集号

緑丘

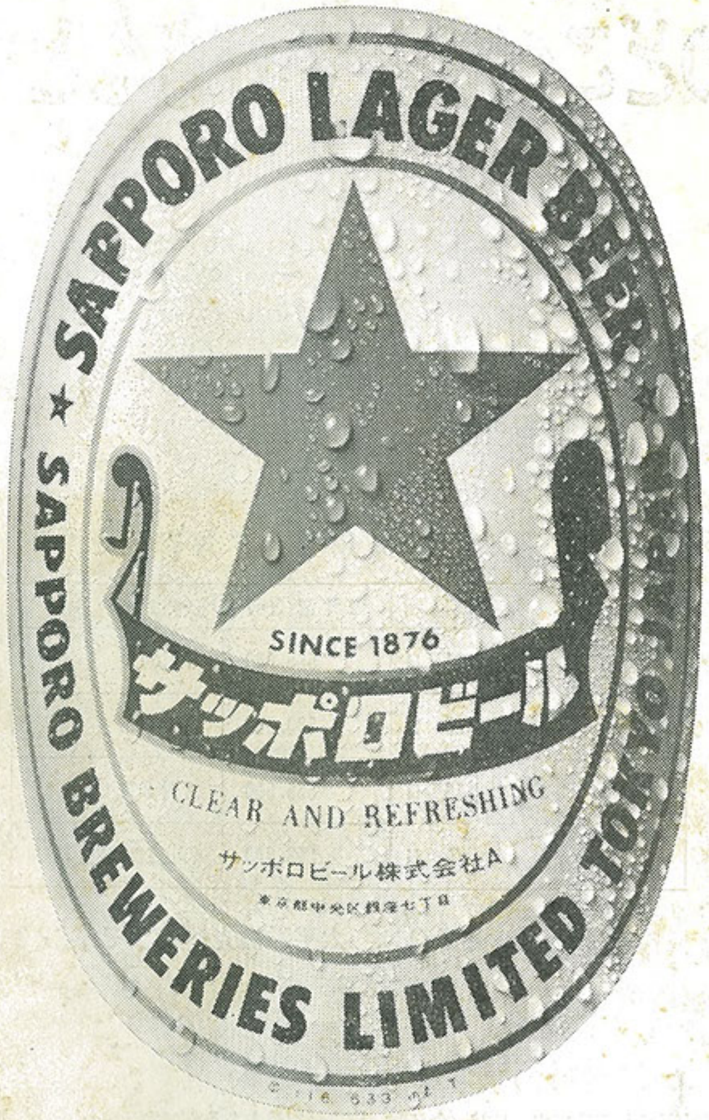
小樽商大同窓会誌

1969 NO. 64・65

昭和四十四年四月二十五日発行（隔月発行）

緑丘 第六五・六六合併号

発行所 兵庫県西宮市清水町一一一六 蓑目英三方 緑丘編集部



サッポロビールは
最初のうまさが持続する

サッポロビールが90年の歴史のうちに育て上げた名酵母M₂。それが純粋なうまさをつくります。いやなニガ味やくどさがありません。だから何杯飲んでもうまさが持続。一度ぜひ ほかのビールと飲み比べて下さい。

味は本場の――――ミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー